

はるかかのひまわり



23

はるかかのひまわり

生きることへの希望とたくましさ

1995年（平成7年）の夏、神戸。

このひまわりがはじめてさいた場所は、空き地でした。その空き地には、なかのよい家族の住む家があったのです。でも、地震でつぶれて、その家はなくなってしまいました。家だけでは、ありません。

明るくて、だれからもすかれていたはるかさんの命も、なくなってしまったのです。

地震のあった日、近所の人たちは、ひっしになって、家の下じきになった家族を助けようと思いました。でも、はるかさんだけは、とうとう助けることができませんでした。

夏のある日、近所の人たちは、空き地になったところにひまわりの花がさいたのを見つけました。

だれもたねをまいていないのに…。

「はるかさんの生まれかわりかもしれない。」

そう思った人たちは、このひまわりを大事に育てました。

花がかれると、たねをとって、あちこちに植えました。

遠くに住む人にも送りました。

次つぎと、ひまわりのたねをまく人がふえていきました。一つのたねが、いっぱいの花をさかせるようになりました。

はるかさんには、お姉さんがいました。はじめ、お姉さんは、みんながひまわりを育てているのを悲しい気持ちで見っていました。「いくらひまわりがさいても妹は帰ってこない…。」

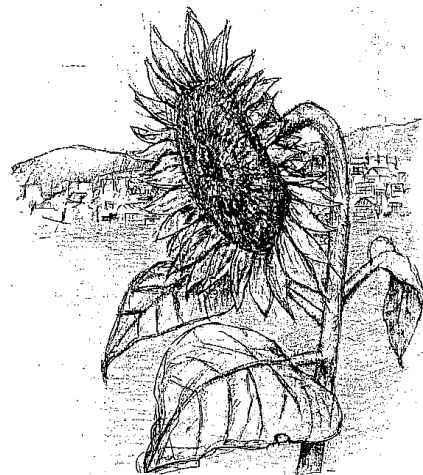
それでも、「妹のいのち」として大事に育てている人に会うたびに、気持ちがかわっていきました。

毎年毎年、さきつづけているひまわりの花を見るたびに自分の気持ちが、だんだん元気になるのがわかりました。

地震から9年たちました。

お姉さんは、やっと、「妹は、ひまわりになって、みんなの心に生きている。」と思えるようになりました。

そして、はじめて自分の手で、ひまわりのたねをうえました。神戸のまちが、ひまわりでいっぱいになることをねがいながら…。



「はるかかのひまわり」は人びとの心の花。